

編 集 後 記

今まで「胃と腸」はほとんど胃疾患のことでしめられていたが、本号は趣をかえて小腸をテーマにして発刊されることになった。

日本のある有名な胃疾患学者が放談されたことがある。それは自分は胃のことを考えると太平洋へ船出したような気になる。自分はどこへ行き、どこの変化を探す気なのかと自分の目的がわからなくなる。それで胃の部分を九つ位にわけて、それぞれの場所、各種の検査方法をそれぞれ配当し、一つの部分につき3人の医師を配置し、27人で、一つの胃を検査して10年位やったら一寸面白いことができるのではないだろうかといわれたことがある。

どうも胃というものは広すぎる気がしてならない。逃げ口上ではないが、深く研究している人ほど胃が大きすぎると思うのは当然のような気がする。

また早期胃癌でも同様で、臨床的に各種の方法で数多く発見されてはきたが、10mm以下の単発のもの、IIb 等については、なんとなくのびなやみの感からぬけきれない。

これらは胃についてであるが、十二指腸球部のような小さなところでも、潰瘍瘢痕がどのような深さの潰瘍がどのような型で治癒し、どのような型になり、肉眼的にわかるとかわからないとかすらわかっていない。

小腸ということになると十二指腸球部の数百倍の長さのものであるから、地球上のあらゆる海洋とも考えられるであろう。この意味で細田先生の発言はそのままにうけとれよう。

小腸疾患の全世界の地理的分布の立場からながめてみることも必要であろうが、診療技術のまずさを棚上げしての議論もどうかと思うが、外国文献一辺倒も困りものである。

全般的に日本の疾患が漸次欧米化の傾向にあることは否定できないので、自分の経験で自分の手をよごしての意見が数多く出てくることを期待したい。

<青 山 大 三>